考えウマ

第七十九回『シン・藪の中』と『藪の中』(KOW版)

藪にも理由がある。

弦楽器イルカ ⇔友人

目次

第七十九回『シン・藪の中』と『藪の中』（KOW 版）〜U から G へ〜 . . . 1
第七十九回『シン・藪の中』と『藪の中』（KOW 版）〜G から U へ〜 . . . 7
第七十九回『シン・藪の中』と『藪の中』（KOW 版）〜G から U へ〜 . . . 9
第七十九回『シン・藪の中』と『藪の中』（KOW 版）〜U から G へ〜 . . . 14

第七十九回『シン・藪の中』と『藪の中』（KOW 版）～U から G へ～

前回のやりとりの後から、ずっと学生時代に本当に書きたかったことを書いてみた。
当時、授業では書けない真実みたいなことを書こうとして、まとめられなかった気がする。

藪の中のもう一つの物語

以下は『藪の中』を読み込んだ読者を前提とした、作品の解釈である。作品の内容を知らない向きあるいはあやふやな向きには、作品そのものの説明は省略しているので、今一度作品を読み直しておいて欲しい。
『藪の中』は「真相は藪の中」と言われる通り、真実というのは主観によって異なる不完全なものであることを上手く描いた小説である。
しかし、作者芥川龍之介の意図通りかどうかは置いておくとして、作品を丹念に読み込むことで、見えてくる新たな真実があり、時代背景により隠れた部分が見えてくる。それは表向きには作品には書かれていないものの、いわば論理的必然として作品に書かれた、もう一つの『藪の中』の物語である。

嘘の開始地点

多襄丸と真砂、武弘（あるいは巫女）の 3 名が共通して語る内容のうち、あきらかに一点おかしな点がある。
それは多襄丸が武弘を最初に襲うところで、半町というから約 50 メートルほど、真砂のいる位置から離れた現場で起きたと言われている事である。武弘が多襄丸に縄で縛り上げられたのが、深い藪の中とはいえ、たったの 50 メートル先である。真砂が異変に気がつないというのは、極めて不審ではないか。いくら不意をついたとはいえ、抵抗する男を縛り上げるというのは、大きな物音を立てずに達成できることではない。あるいは普通に考えるなら、急に襲われた武弘はむしろ離れた場所にいる真砂にも危険が及ぶことを感じ、せめて真砂に危険を知らせることくらいはできたはずだ。50 メートルというのは決して大声が届かない距離ではない。

検非違使や多くの調査員によって、現場は特定できていることから、距離の違いなどの勘違いはないだろう。

なぜ武弘は声を上げなかったのか、この疑問点から『藪の中』の作品中で表には描かれなかった闇の真実、もう一つの物語は始まる。

武弘が声を上げなかったのはなぜか。武弘が多襄丸に縛り上げられる事を知っていたからと考えられる。少なくとも武弘と多襄丸の間では口裏合わせがあったに違いない。武弘が声を上げたりせずに、易々と木に縛り付けられたなら、それ以外に考えられない。繰り返しだが、抵抗する男を無音で木に縛りつけるというのは不可能な行為である。

もう一つの疑問も生じる。では 2 人の動機は何か。それは多襄丸が武弘を縛り上げ、真砂を武弘の前で犯すというアブノーマルなプレイをすることと考えられる。それに双方同意していたので、武弘は縛り付けられる時に抵抗はしなかった。それ以外のことも考えられるかもしれないが、おそらく出てくる想像は、この説よりは納得感が低いものばかりだろう。以下では、これを前提に深掘りをしていく。

真砂の関与

真砂はこのアブノーマルなプレイにどの立場で参加したか。言い換えれば、真砂はプレイの強制参加者なのか、あるいは任意参加者なのか？

もし、真砂が何も知らなかったとしたら、真砂の行動には不審な点が多く残る。

そもそもの反社的人物である多襄丸に対して、公務員である武弘が、あっちにお宝が眠っているという笑えるくらい怪しい理由だけで、疑いもせずに人影のない藪の中に入っていく、そんな状況は不自然でないか？

あるいは、2 人が藪の中に消えてしばらく後に武弘の体調が悪くなったという、これまた子供じみた嘘くさい理由を聞かされて、ホイホイと多襄丸についていくのは不自然でないか？

平安時代の京都がたとえ治安の良いところであったとしても（私はそうは思わないが)、真砂がピュアでお人好しだとしても（そのようなキャラとは描かれていないが)、流石に不用心すぎるし、不自然すぎる。

こうした観点からも、真砂は何も知らない被害者ではなく、これから行われるプレイについては事前に知った上での参加者の一人であったと考える方が自然である。

プレイ内容

今では NTR（寝取られ）として知られる変態プレイである。多襄丸、武弘、真砂はそれぞれの立場に身を置き、そのシチュエーションを十分に楽しんだに違いない。ここまでで解明してきたように、3 人の間ではこのシチュエーションに同意しているとは言え、同意を意識してはせっかくのプレイも興醒めである。3 人はそれぞれが、同意を無意識の領域に追いやり、プレイに夢中になったに違いない。

そしてこのプレイ中に事故が起きた。何者かが興奮のあまり演技と現実の境目がわからなくなったのだろう、勢いで武弘を刺し殺してしまった。あるいは武弘が自分自身を刺してしまった。もちろん誰が刺してしまったかは、描かれていないのでわからない。ただ言えるのは、起きたのは殺人というよりむしろ事故である。

その後の行動

多襄丸と真砂は死体の隠滅よりも逃亡を選んだ。冷静に考えれば、死体を処理した方が良さそうだが、とにかく 2 人はそうしなかった。

ここで多襄丸は武弘の太刀と弓矢を盗んでいる。おそらくは突然の事故に動揺し、秘密のプレイ内容が世間に知られるくらいなら、強盗殺人犯になることをこの時点で漠然とイメージしていただろう。

また真砂は馬を乗り忘れている。おそらくはこの時点で被害者で命からがら逃げ出した妻を演じるイメージを持っていたのだろう。これが、この後の二人の証言につながってくる。

多襄丸の証言再検証

多襄丸は見栄を重んじ、豪傑な悪党として死ぬことを選んだだろう。この件がなくてもどうやらどのみち死刑になることを知っているようだ。肝心のアブノーマルプレイは墓場まで持ち帰るつもりだったであろう。もちろん武弘とのチャンバラのシーンは明らかに多襄丸の見栄からくる安っぽい創作である。

真砂の証言再検証

彼女にとって死ぬまで隠したいのはアブノーマルプレイである。あの事故死がバレるよりは、自分が殺人者になる方がマシであると考えているだろう。その上での発言と考えれば、矛盾は無い。

武弘（巫女）の証言再検証

ここでは超常現象であるイタコの憑依を実際の武弘の発言とみなすものとする。やはりアブノーマルプレイで事故死してしまった事は、死んでも（いや死んだ後でもというべきか）秘密としたいようである。

整理すると、3 人の変態 SM プレイの結果、興奮しすぎた誰かが武弘を刺してしまった。その後、残された 2 人は口裏合わせせずに逃亡した。3 名とも秘密をバラすくらいなら死んだ方がマシと思っており、その上での発言がある。こうしてみるとむしろ『藪の中』での発言におかしな点はない。ただ口裏を合わせていないので、違いがあるだけだ。

作品で隠されるということ

観点を少し変えると、当時（ここで当時というのは、作品の舞台の平安時代にしろ、作品が生まれた大正時代にしろであるが)、アブノーマルな性癖を言説として記録に残す事はできなかった。いわば社会の秘密の領域として、乱れた快楽としての性的な領域がある。つまり時代が変わった事で、秘密で覆われていた部分が解けていき、現在になって真実が現れ始めた。NTR をテーマにしたライトノベルなどが多く登場した現代だからこそ、答えが表にだせるのである。
『藪の中』に隠れた真実とは、平安時代のアブノーマルな性癖を描いたポルノ小説である。それは藪の中に隠された、語ることのできない発言であり、書かれることのない言説にあった。しかし、現在になり、それが表に出てくるようになったのである。

実際の歴史では

芥川は『今昔物語』を元に『藪の中』を書いたという。だとすると、作品の原型は今昔物語にあり、もしかしたら、作品に書かれた事は事実に基づいているかもしれない。平安時代に秘密の NTR プレイが興じられていたかもしれない。これはこれでロマン溢れるストーリーであると思う。

最後の秘密

さて巫女という超常現象の扱いである。死者の魂を呼び戻して語り、現実の外、つまりは全てを知る世界からやってきた存在である。一見すると最後の巫女の発言こそ真実の発言であると位置付けられても不思議ではない。しかし『藪の中』ではあくまでも証言の一つとして位置付けられている。
なぜ巫女の発言には真実味が薄いのか？ なぜ『藪の中』の答えは巫女の発言にあると感じないのか？
それは多襄丸と真砂が我こそは真犯人と告白するその動機や根拠が見えないからで、二人がわざわざ嘘をつく必要が見出せないからだ。2 人が嘘をつく動機がまったく描かれず意味不明なままなので、最後の巫女の発言を持ってしても全体の解明とはならず、作品として不明瞭さが残り続けるからである。試しに巫女が 2 人の嘘の動機を語ったのなら、作品の構造上誰もが巫女が真実を語っているとして作品は終わっただろう（そし

ておそらく『藪の中』は駄作と言われただろう)。

では巫女の位置付けを、あらためて真実を知る現実外の存在ではなく、一般人としたらどうなるか？ また新たな『藪の中』が見えてくる。秘密のアブノーマルプレイと重ねて検証してみよう。

巫女の物語

巫女はイタコとして死者を憑依させる仕事をしている。賃金は雇い主から出るが、多くの場合は担当の検非違使から直接支払われる。科学調査もなく、犯罪が明確な証拠に基づかずに裁かれる世の中である。告白は最も重い証拠であり、ほぼ唯一の真実である。巫女は真実製造機として、司法に組み込まれていたに違いない。

今回は謎の存在が巫女を利用して一つの殺人事件を自殺として片付けようとしている。だが、よくあるような未解決事件を自殺と片づけるのではなく、今回は多襄丸か真砂のどちらかが犯人である殺人事件である。なぜわざわざ、自殺とする必要があるのか？ 他殺では都合が悪いのは誰なのか？

巫女に情報を吹き込むことができるのは、事件のことを詳しく知っている人物だけだ。すると登場人物では多襄丸、真砂、生前の武弘、検非違使くらいである。前の 2 人は別の告白をしていることから、雇い主である可能性は低い。もしかしたら何かややこしいことを狙っているかもしれないが、意図通りの結果に導けるような単純な状況ではないだろう。

検非違使としても、わざわざ犯人が自白してきている事件をややこしくする動機がないので違う。

生前の武弘が自分の死を予想して、死んだ場合の発言として巫女にあらかじめ依頼していた可能性はある。だが、アクシデントにしては場所や様子などが詳細に伝わりすぎていて、やはりこの説も現実的にはあり得ないだろう。

とすると巫女に吹き込んだのは誰か？ 答えは誰でもない、に違いない。つまり巫女は巫女で事件現場を目撃して、その内容をもとに武弘の自殺であると発言をしたと思われる。

巫女が現場にいたとしたら、多襄丸や真砂がいっさい巫女の話題に触れないのは、理由があるに違いない。

これらの状況から、答えは絞られる。実はこのアブノーマルプレイは巫女が関わる秘密クラブの中で行われた出来事ということだ。クラブの中での巫女の立場はわからない。主催者かもしれないし、ただのスタッフかもしれない。いずれにせよ平安時代にしてはこの組織はしっかりしたものだろう。事故で人が死んでも適切に対応ができているし、会員には命に変えても秘密を守らせている。

これほどの組織が、平安時代に実際あったとしたら、歴史的な大発見である。「今昔物語」をベースにし、芥川の『藪の中』経由し、暴露されつつある、ひょっとしたら日本の歴史におけるフリーメーソンのような闇クラブが実際にあったのかもしれない。

二つの文学作品を通じて、決して書かれなかった歴史の裏側が見え隠れしている気が

する。

もちろん「今昔物語」も『藪の中』もフィクションであるが、当時を生きる人々を丁寧に描いた結果、秘密の組織が浮き上がってきたとしても、不思議ではない。

そんな壮大なロマンが、藪の中には眠っているのではないだろうか？

終わり

第七十九回『シン・藪の中』と『藪の中』（KOW 版）〜G からＵへ〜

馬に問はれたる鹿の物語

風の噂で聞いたけど、アンタ、藪の中で殺されたあの二本足に飼われてた馬なんだろ。ああ、オイラ見てたよ、アンタの飼い主の最期。知りたいんだろ？

オイラ、あの日エサを探しにあの藪の中に入ったんだよ。そしたら、変な臭いがしてさ。

見たら、二本足のオスが縛られてんだよ。そう、猿じゃなくて、毛がない二本足のオス。あれがアンタの飼い主だったんだろ？

もちろんあいつら危険だからすぐ逃げようと思ったんだけど、そいつは縛られてて動けないし、なんか俺も固まっちゃって。驚いて。

んで、しばらく様子を見てたんだけど。すぐそばで別の臭いがすることに気付いて。交尾の臭いがした。

それでオイラも変に興奮して。気づいたらすぐ近くに別の二本足のオスとメスがいて、なんかずっと大声出してるのが聞こえる。たまたまオイラの位置は藪に隠れてて向こうからは見えないんだけど、それどこじゃない感じだった。

よくわからんけどたぶん、つがいになるとかならないとか、そういうケンカじゃねえかな。そいつら叫んだり興奮してる。アンタの飼い主はそれを睨んで見てたよ。

どうすんだろって。そしたら、叫んでるその汚いオスを、メスがけしかけてさ。その汚いオスがアンタの飼い主に近づいて行って、あの尖った棒を突き刺そうとした。そう。オイラの親父もあの棒に殺されたよ。

そしたら、アンタの飼い主は口から草を必死で吐き出して、泣き叫びだした。そりゃ殺されたくないだろうな、あの棒で。オイラの親父と一緒よ、泣きながら命乞いしてるんだろうとオイラは思ったよ。必死に泣いて鼻水たらしてさ。

いや、嘘じゃねえよ。そいつらつがいにとって邪魔だから殺そうってことだろ、たぶん。アンタの飼い主は、そいつらの邪魔はしないから、命だけは見逃してくれって泣いてたんだろ。

メスかい？ あぁ、ただ見てたよ。それがすげぇ冷たい瞳だった。笑みもなく、ただ蔑んだ眼で、アンタの飼い主をじっと見てた。

まぁね、確かに惨めな泣き声でさ。つい笑っちゃったねオイラは。可哀想ではあるけど、しょせん二本足だからな。あいつら殺し合って早くいなくなればいい。

いや、そしたらさ。泣き落としがうまくいって、汚いオスがあの棒で縄を切ってやったんだよ。

アンタの飼い主はヘコヘコして、頭を地べたに何度もくっつけてさ。それで終わるかと思ったらさ。アンタの飼い主がいきなり飛びかかって、棒を持った汚いオスの手にかじりついた。棒が勢いで飛んでって。そっからはもう取っ組み合いよ。かじったり引っかいたり。棒がない二本足の争いは醜いね。猿よりひどいわ。

んでもさ、結局勝ったのはアンタの飼い主の方だった。

アンタの飼い主は、汚いオスの上に乗って、首を絞めて殺そうとした。オイラもそれで終わったと思った。

そしたらそこにメスが走ってきて、アンタの飼い主の胸を小さい棒で刺したんだよ。

そう、だよな。だから、そのメスは汚いオスとつがいになりたかったんだなって、思うよな。アンタの飼い主が邪魔だから殺したんだな、って。ウマシカならな。

それが違うんだよ。四本足の常識が、二本足のヤツラには通じねぇんだよ。

そのメスはさ、アンタの飼い主を刺した後、負けたほうの汚いオスの顔にペッて、唾吐いて、小さい棒をその汚いオスの鼻先に突きつけてさ。それでなんか捨てゼリフ吐いて、走っていっちゃったよ。汚いオスも呆然としててさ。「追って来たら殺す」とかって脅したんじゃねえかな。

オイラその後気になってさ。メスがあの棒を埋めるとこまではつけたよ。

アンタ、馬のクセに死んだ飼い主のこと、ずっと気にして聞きまわってるって評判だよ。よっぽどあの二本足によくしてもらってたんだな。っても昔のことはこの辺にして、自分のために生きようや。

じゃ、達者でな。

第七十九回『シン・藪の中』と『藪の中』（KOW 版）〜G から U へ〜

令和にもなって、なんでこんなにも藪の中なのかって話だけど。

そもそも 20 年以上前に、『藪の中』の真犯人についての課題があって、U は巫女説、俺は作者説って感じだったと思う。

でもその頃のレポートをなくしちゃった話から、気づいたらここに辿り着いてたね。

あの頃も別に悪い評価じゃなかったんだけど、U が新しい論考を書いてきたから、俺も全く新しく書き直したってのがまずある。

あの頃の U の巫女説も、「文学部唯野教授」テイストで面白かったけど、そっから更に『シン・藪の中』として、現代の合理性を持ち込んで考えたんだね。

確かに U の言う通り、全員共犯説が一番有力かもしれない。行政？ って思ったけど、組織の論理は確かにそうだね。面白いし、笑えるし、でも納得もする。

NTR って源氏物語とか、調べたら神話の時代からあったって。以前「性」の言語化について話したけど、LGBT 等も NTR も（学問か趣味嗜好かは別として）広く言語化されることで、よりオープンな題材になるのは確かだ。良くも悪くも BL みたいにね。

ま、とにかくそれぞれの証言が食い違うのは、それぞれに隠したいことがあるからだろう。その隠したいことを探るのが、真相に一番近い、というのは間違いないアプローチだと思う。

んで、俺は当時の論考とは全く別のことを書いたんだけど。

なんでこうなったか説明する前に、少し長くなるけど、当時のなくしたレポートについて（今の考えも加えて）書いておく。

ちなみに巫女の霊媒については、9 次元の超弦理論や量子何学の並行世界やマルチバースやらって現代の科学を言い訳にして、「霊媒は電磁波の受信だからアリ」って立場です。

まず結論の前に、もちろん、凶器の可能性があるのは、真砂が持って逃げた「小刀」か、多襄丸が都にはいる前に手放した「太刀」だ。もしこの二つが発見されていれば、武弘の刺し傷と照合して、真犯人特定の有力な証拠となるだろう。

逆に証言だけでは絶対の真犯人を突き止められない。疑わしきは罰せずではないが、これまでの証拠だけでは可能性の話しかできないはずだ。

その上で、さっきも言ったように、三人の証言が食い違うのはそれぞれ、隠したいことがあるからだろう。

三人とも、自分が武弘を殺した（または自死した）と言っている。本来であれば、他の誰かを真犯人と主張してもいいところなのに、自分が犯人だと偽りの主張をしてまで、何かを隠したい人間がいる。それは誰で、何を隠そうとしているのか？

それを突き止めれば、自ずと真犯人は見えてくる。

とはいえ、もったいぶりたくないので簡単にまとめると、多襄丸と武弘には嘘をつく動機がある。

Ｕも指摘した通り、多襄丸はもともと罪人であり、捕まれば極刑は当然という表現がされているので、どうせなら大悪党としてカッコよく見栄を張って死にたいはずだ。自分がカッコよく武弘を殺したと偽証したとしても、納得できる。

それとは逆に武弘は、死人なのでもう生き返らない。多襄丸や真砂に殺されたと、生き恥ならぬ死に恥をさらすくらいなら、自分で潔く自決したとカッコつけた方がマシだ。

ちなみに、武弘の証言は多襄丸の名誉も確保された証言なので、もし武弘の証言が本当の場合、多襄丸は嘘をつかずに武弘と同じ証言をしてもよかったはずだ。つまり、多襄丸が武弘と違う証言をしたのは、「武弘の証言がフィクションだったから」の可能性が高い。

となると、真砂はどうか。

まず真砂が、多襄丸の証言のように武弘を置いて逃げていたなら、最後まで「武弘の死」を確認していないはずだ。つまり真砂が「武弘を殺した」と懺悔した理由は、「武弘の死」をどこかの時点で確認していたからだ。となると、多襄丸の証言の一部は嘘という可能性が高い。

そして何より、実は真砂にだけ、武弘を殺したと嘘の懺悔をする動機がない。

そもそも彼女は一番の被害者で、無実であれば正直に証言できる立場のはずだし、最悪、真砂は多襄丸か武弘に罪をなすりつけて、自分は何も知らないとシラを切り通してもいい立場だ。さらに、清水寺の懺悔は検非違使の取り調べとは関係がない「懺悔」だ。

しかし、真砂はあえて自分が罪をかぶり、武弘を殺したと「懺悔」した。なぜか。

「あの盗人に手籠めにされて、逆らったら殺されるかもしれないと思った。怯えながら、でも二人の男を天秤にかけるようなことを言ったのも、自分を守るためだった。弱い男に自分は守れない。悔しかった。守ってほしかった。だから、自分を守れなかった夫なら、殺されても仕方ないと思った。ところが、夫は殺されなかった。このまま夫が生き

残ったら、次は私が殺される。いや、殺されたほうがマシで、もしこのまま生き延びても、盗人に手籠めにされた挙句、夫を裏切った売女として、何重もの生き恥を晒すことになるだろう。私を守れなかった夫のせいで、私が生き地獄を味わうくらいなら、私がこの手で夫を殺すしかなかった。あの眼。夫も盗人も惨めな眼で私を見ていた。あの二人の眼から一刻も早く逃れたかった。だから本当は、あの盗人も殺した方が良かったと気づいたのは、随分逃げた後だった。あのとき、もっと強かな瞳で先導してくれていたなら、私は逃げなかったかもしれないのに。しかしあの腰抜けの盗人が、どこかでまたヘマをして捕まったらどうなる？ 検非違使に愚かな証言をするに違いない。私は何も知らないですむだろうか？ とはいえ、夫は死んだからもう証言できない。良かった。待って。検非違使はたまに霊媒師を使うと聞いたことがある。あんな霊媒なんて信用できないけど、未練がましい夫のことだ、霊媒師の口を使って何か恨み言をのたまうかもしれない。私が殺したことが後からばれるのは良くない。あそこに埋めてきた小刀が見つかったら厄介だ。どこに捨てても見つかりそうで、どうしていいかわからなかった。もう寺に入るしかない。夫に化けて出られないように、できるだけ正直に懺悔して、でも疑われないように、私も泣きながら弁明しよう。ああいやだ。女はなんて厄介なんだろう。どうせなら、強い男に生まれたかった」

Ｕの要望で真砂の心境を大幅に脚色追加してみたけど、真砂犯人説の証拠として俺が提出したのが、この作品の構造そのものだ。

様々な視点が入り混じるこの作品のキーワードとして、視点＝目＝眼に着目した。

約 12000 字の作品中、「眼」という表記が 8 つ、「目」という表記が 6 つ出てくる。

読者にとって、様々な眼やその光が読後の印象に残る作品だったに違いない。

そして最も重要なのが、作品中、眼でも目でもなく、別の言葉に言い換えている箇所が、１つだけある。

それが、「瞳」だ。

この「瞳」は、約 12000 字の作品中において、前後約 6000 字の部分に、つまり作品のほぼ中央に表記されており、この真砂の「燃えるような瞳」を中心に『藪の中』という作品は構成されているといっても過言ではない。

真砂の「瞳」に翻弄される様々な「眼」と「目」、更に読者の目、批評家の目、様々な視点が交錯する本作において、今も『藪の中』から、あなたを見つめている一つの視線に気付いているのだろうか。それは、『藪の中』ならぬ「草葉の陰」から真犯人論争をほくそ笑んで視ている、作者本人に他ならない。

絶対の真犯人が見つからないよう凶器を隠滅しつつも、真砂の「瞳」に罪をなすりつけた芥川龍之介本人こそ、『藪の中』で殺人を起こし後世の読者にまで論争を煽った真犯人だ。

ってレポートだったはずなんだけど、もう手元にないから思い出せない。
ただ、俺もあれからだいぶ歳食ったワケだし、せっかくだから U みたいに新しいこと書きたい。
昔パブーで KOW（コノママジャオワレナイ）企画って、他人の作品（N ウェイの森）に勝手に別の終わりを付けるって企画をやったから、ついでにウマシカも乗っけときたかった。

そこで今『藪の中』を読み返して、それぞれの証言に矛盾しない最大公約数を取って、裏設定を考えた。更にウマシカを混ぜたらちょうど三人のセリフも曖昧にできた。
改めて、気負いなく素直なウマシ考として、俺が芥川ならこういう幅のある裏設定を先に用意したうえで、それぞれの証言を書いただろうな、と思う。
つまり、多襄丸と真砂の間で何らかの交渉があり、多襄丸は縄に縛られたまま抵抗できない武弘を殺そうとし、武弘はドン引くぐらい命乞いして、それに油断した多襄丸は武弘に反撃され、このまま武弘が勝ったら自分の身が危うい真砂は武弘を殺し、そして逃げた。

核心は当たり前でつまらない。って、いつものウマシ考に辿り着けたと思う。
ただ、書き直すにあたり今さらネット漁ってみた結果、参考になる論考はほぼなかった。正直、みんなムシ考でがっかりした。
むしろ俺が持ってる文庫の後ろに掲載されてた、大正 11 年に書かれた解説の方が参考になった。真砂犯人説がさらっと書いてあった。黒澤映画版もよかった。
なんかお互い頑張っちゃったから、せっかくだしあえて今につなげるけど、この国のエンタメは萌えと説明ゼリフ過多で国民が糖脳化してると俺は思う。
某推しの子とか某東リベとか某すずめとか俺は全くダメで。そもそも「推し」とか「お布施」って言葉も（「炎上」と同じ）まやかしだ。自分の不安を信仰で誤魔化すために汚い銭を払いますって、せめて胸張って言えよ。
不安を信仰で誤魔化して、推しって言葉で課金の後ろめたさを誤魔化して、自分に責任のない萌えフィクションで退屈を誤魔化して。そりゃ、VR で人生自体を誤魔化す人類が誕生するワケだよ。
これから、硬派な世界基準のエンタメに駆逐されつつ、どこまで糖パゴス化してくんだろう。その上で、自分がどう生き残るか考えるのが大事だよね。どうかな？
今回はこんな感じ。お互いお疲れ様でした。

第七十九回『シン・藪の中』と『藪の中』（KOW 版）〜U から G へ〜

実は藪の中の論評もかなり読みまくったんだけど、どいつもこいつも大したこと書いてなかった。

推しの子流行ってるのは知ってるが、全くみてない。そんなに評論されてるなら、少しみてみるか。

『藪の中』を作品のちょうど真ん中にある瞳から読み解くというのは、すごくオリジナリティある評論だと思う。

その真ん中にある真砂の瞳のあたりを読むと、多襄丸は真砂の瞳によって心が大きく揺さぶられたことが書かれている。その時、多襄丸は単に真砂を力づくで手ごめにするのではなく、武弘を殺害して真砂を奪うのではなく、真砂の心を奪おうとする強い欲求に駆られたように思える。燃えるような瞳がなければ藪の中の事件は起きなかったに違いない。

同様に真砂の懺悔でも、瞳ではないが目の力の影響は大きく描かれてる。武弘の目の中には「一身の心」があり、真砂はその目をみて気を失っている。

どうやら、この作品は目力によって動かされる男女の話のようではある。

だけれども武弘は、目力ではなく、どちらかといえば幻聴のような、ぼんやりとした映像と声に動かされたようだ。ここに統一性がないのは何か理由があるだろうか。

いずれにせよ、目力によって構成される作品であることの解説は面白かった。

理屈ではなく、心理描写部分を突き抜けて考えても、新しい答えに行き着くのではないかと思えたし、学生時代も今でもそれこそが文学だと思う。俺が書いた合理的な解釈論は、文学ではなく社会評論みたいなもので、本当に繊細な文学論にはなり得ないものだと思う。

あ、書き直すならなんだけど、俺みたいな合理的な理屈はない方が良いのではないかと感じた。上手く書けないけど、目の力と瞳の妖力が漂う世界観みたいな物を描けないかね？

ちょっと俺には無理だったけど、文学的説得力みたいなのはあって、それは合理的な 50 メートルの距離がウンタラとかじゃない、感性で書くというか別の説得力で書ききれないかな？ って思った。俺には無理だけど G ならいけるんじゃないかな？

そういえば、映画の『saw』は最も近い場所に潜んでいながら、まさに「見た」という瞳の話なんだよね。それが世に出る前から、安全な場所で混乱する読者をみてほくそ笑む瞳の存在というのを描いたことはすごく良い着眼点だとあらためて思うし、背筋がゾッとするような発想だと思った。

『藪の中』は今昔物語を改良した、「奇書」であるし、芥川龍之介に憑依した何かの妖力が、このような作品を書かせたと思う。そもそも検非違使の調書には犯人不明の結論はあり得ないし、現在の調書でもそのようなドキュメントは存在し得ない。行政の力は、一つの合理的な真実を力づくでも作り出してしまうが、『藪の中』の瞳はそんな都合の良い真実を嘲笑うかのように、世の中に突如として現れた妖力の表れだと思う。そんな方向で書いてもらえないかな？

考えるウマシカ～第七十九回 『シン・藪の中』と『藪の中』（KOW版）～

著　　弦楽器イルカ

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社